



山元春挙と早苗会

滋賀県立近代美術館
館長 石丸 正運

山元春挙（1871～1933）といえば円山応挙（1733～1795）にはじまる京派の正統を受けつぎ、明治期にその近代化をはたした画家であるといわれます。

いわゆる京都画壇にあって、明治、大正、昭和と三世代にわたって、その活動期があり、竹内栖鳳とともに、その双璧と並び称せられたことは良く知られているところです。

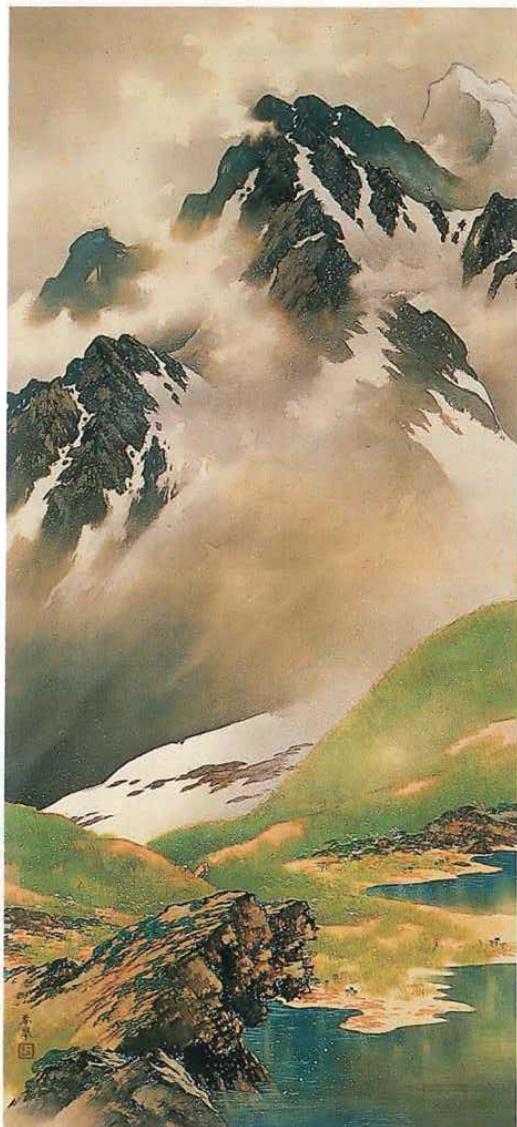
山元春挙は湖国が生んだ近代で最もすぐれた日本画家といってよいと思います。

京都で明治以来、活躍してきた画家たちを総称して、京都画壇の画家といいますが、湖国からはその黎明期を代表する岸竹堂とか、野村文挙（1854～1911）といった日本画家もいます。春挙は京都画壇で日本画の近代化をすすめてきた第二世代の画家といえます。つまり、京都府画学校の創立に力を尽した幸野棋嶺（1844～95）、森寛斎（1814～94）、岸竹堂（1826～97）といった第一世代を受け継いだ画家ということです。

さて、春挙は明治4年11月に滋賀県膳所村（現在大津市中庄）で、山元善三郎・直子の長男として生まれています。大津打出小学校を卒業し、一時、五個荘町の親戚小杉家に養子となり近江商人としての道を歩むことを考えたこともありますが、身体がそう丈夫でないこともあります。膳所へ帰り、大嶋一雄塾で漢詩文を学んでいました。そんな折に、たまたま大津に遊んでいた野村文挙に会って絵を見てもらい、明治16年（1883）2月、文挙に入門して絵を学ぶこととなりました。春挙が13歳の時でした。

春挙が15歳の時、師である文挙が東京へ出て、学習院の先生になるということがあり、文挙は師匠であった森寛斎のもとへ、春挙を預けることとなりました。したがって、春挙は寛斎の孫弟子であったのが、晩年の寛斎に直接に絵を習うことになりました。

寛斎は山口の人で、円山派再興を願って大阪で森徹山に学び、京都へ出た人であります。



「高嶽爽氣」一九三〇年 山元春挙

いわゆる勤王の志士で、清潔で節操を守る人でした。春挙は16歳で早くも京都青年絵画研究会に出品して、一等褒賞を受け、画壇で注目されるようになりました。

明治24年(1891)、21歳で竹内棲鳳、菊地芳文とともに「青年画家懇親会」を発足させています。23歳で師の寛斎の家を出て独立し居を京都室町二条上ルに構えました。2年後には膳所の人、生駒秀一の三女ため子と結婚しています。

春挙は2人の師、文挙からは風景画の近代的描写を学び、寛斎からは芸術の風格、それは大義名分を明らかにして廉潔と節操をみがくことであり、求道者の心がなければ人格の形成もできないという、絵画の精神的な要諦を学んだといえます。

応挙に始まる円山派の絵画は写生を基本にどちらかといえば、技術本位のきれい事ですます傾向がありました。それだけでは日本画の近代化の中で、生き残る事はできません。そのために春挙は天龍寺238代住持峨山昌禎の会下に参禅します。20代のことであったといわれています。

明治34年(1901)の新古美術展覧会に「法塵一掃」を出品して、金牌次席を受けています。禅僧の故事を描いたもので、いわば春挙の精神的深さを示す絵ということができます。



「法塵一掃」1901年

山元春挙

これに先立ち、明治32年(1899)に京都市立美術工芸学校教諭、明治42年(1909)には京都市立絵画専門学校の教授として芸術教育にたずさわる一方で、明治33年に門下生のための研究機関である「同攻会」を発足させています。このいわば春挙の画塾はのちに「早苗会」と改称されていますが、この画塾からも川村曼舟、庄田鶴友、三宅鳳白、案本一洋などが育っています。湖国との関係では、柴田晩葉、山元春汀(桜月)、疋田春湖などがいます。



「山村密雪」1931年

山元春挙

春挙は幼名を寛之助、成人して金右衛門と改めていますが、文挙に入門した際に一字をもらって春挙という雅号をつけています。

竹内棲鳳(1864~1942)と春挙は京都画壇で並び称せられる存在되었습니다。

松村呉春にはじまる四条派の近代化に成功して大成したのが棲鳳であれば、円山応挙にはじまる円山派の絵画を近代絵画として定着させたのが春挙であるという事ができます。

その肖像写真によっても伺えますように、春挙はハイカラな人であります。洋服もきちんと着込んで颯爽としています。そのかぎりでは禅僧の老師について精神的修養を怠りませんでしたが、彼の絵画理論はきわめて合理的なものでした。写生旅行

には当時は珍しいものであった立体写真機をたずさえて風景を撮影し、高山靈岳へ登った折などには眺望のきく雄大な風景を写生で捉るために、パノラマ式の写生道具を考案して用いたといわれます。

それでいて、「例えば描く対象が松ならば100本の松を写生しなさい。そうすれば写生を超えたところの松の本質が理解され、写生に頼らずに本来的な松を描くことができる」とも言っています。こうして、円山応挙の国宝「雪松図」に対応することが可能な、春挙の「雪松図屏風」の名作がいくつも生まれたと考えられます。

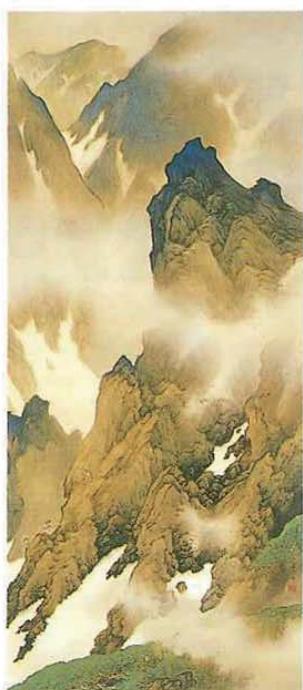
春挙は雄大な山岳地域や名勝地に画題を求めて歩く、行動する画家でもあります。確かな写生をふまえて、華麗で装飾性が豊かな風景画や花鳥画に独自の画格を確立しています。

一方では禅僧の故事を描いて、精神性の深い画題の絵画も描いています。雅号として春挙の外に「一徹居士」、「円融斎」というのがあります。それは一徹者と融通者の間で自らの芸術を育んでいたということもできます。

大正6年（1917）には帝室技芸員となり、故郷の膳所に、琵琶湖と対岸の秀峰三上山をも借景した庭園を持つ「芦花浅水荘」を営んでいます。春挙によればこの庭園も取り合わせと融通の精神から生まれたものといっています。

「鳩のうみ 鏡のような 月はでて よしとあしとを 照らし分けたり」という短歌は春挙が芦花浅水荘で詠んだものですが、観察のするどい画家の目が歌の背後に感じることができます。

昭和3年（1928）の昭和天皇即位の大礼には川合玉堂（1873～1957）と御用の風俗歌御屏風会を描いています。この天皇即位時の屏風は当代最右翼の画家が描くことになっていました。玉堂は悠紀の国、滋賀県の風景を描き、春挙は主基の国、北九州地方の風景を描いています。



「山岳登はん」
川村曼舟

こうして輝かしい業績を誇り、数々の名作を残した春挙は昭和8年7月に63歳を以て、その生涯を閉じています。

春挙のあと、画塾早苗会を指導したのは川村曼舟（1880～1942）です。曼舟は京都生まれで、春挙門下の高弟であります。20歳代から風景画家として活躍し、その足跡は春挙の跡を追うものでした。

帝展の審査員をつとめ、京都絵画専門学校の教授、校長をつとめていますし、昭和6年（1931）に帝国美術院会員となっています。かつて河北倫明氏は曼舟の画風を評して「春挙と曼舟は、もっとも近い師弟関係にはあったが、素質はかなり違っていました。琵琶湖畔に生まれた春挙には一種の地方的なつよさがあり、どこか気骨のただよう画趣があったが、何代も前から京都に暮してきた曼舟には都会的な優しさが目立ち、京風のやわらかみがありました。その点、師と比べると、やや力づよさに乏しく、どちらかといえば決め手のない画風であったといえよう。」と述べています。

京都画壇を二分して活躍した栖鳳と春挙であります。栖鳳門からは西山翠峰、上村松園、西村五雲、土田

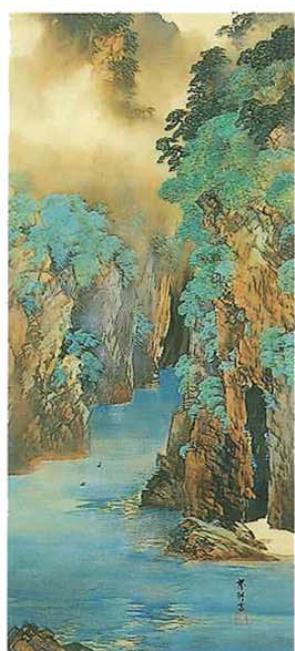


「祇園夜桜」一九四〇年頃
柴田晚葉

麦僊などそうしたる画家がでて、その後の京都画壇で大きな働きをしています。それにくらべると春挙門には師を超えるような画家はでていないように思われます。栖鳳に比べて春挙の評価は必ずしも高くはなく特に戦後低かったように思われます。しかし、最近は春挙の業績も見直され、その画業も改めて評価される傾向にあります。

春挙が主宰していた画塾早苗会で指導を受けた滋賀県生まれの画家として、まず柴田晩葉（1885～1942）

は大津で生まれ、教育者であった父に漢籍を学び、京都市立美術工芸学校、同絵画専門学校本科で日本画を勉強しました。多才な人で絵を描きながら京都外国语学校のフランス語科を卒業しています。和歌を詠み、俳句俳画もよく親



「琵琶湖」一九二七年頃
柴田春湖

しんでいました。その画風は軽妙で、洒脱なところがあります。早苗会では評議員をつとめ、その運営につくっています。

柴田春湖（1891～1961）は大津市膳所の生まれ、絵は長谷川玉純（1863～1921）に学んでいます。大正3年（1914）に早苗会に入ります。玉純から黄邨という雅号をもらっていましたが、春挙門に入つてからは春湖と称しています。主に日本美術協会展に出展し、昭和2年から十数年にわたって、日本各地の風景を描いて出品しています。戦後、県美術展の開設に力を貸し、昭和33年（1958）に県内作家により結成された滋賀県美術作家協会の初代理事長をつとめています。

山元桜月（1887～1985）は大津に生まれ、春挙は叔父にあたります。16歳の時入門して、



「初夏の神嶺」1970年

山元桜月

春汀と号します。明治40年（1907）に開設された第1回文部省美術展覽会に「秋深き上高地」を出品して入選をしています。その後、主に山岳風景を描いて文展、帝展、新文展に出品を続けています。師の春挙がなくなる前後に、雅号を桜月に改めています。桜月も山岳風景を描くことを本領としていましたが、昭和16年（1941）から生涯を閉じた昭和60年（1985）に至るまで、もっぱら富士山を描きつづけています。春挙門では異色ですが、杉本哲郎（1899～1985）も早苗会に入り、春江と号していました。大正11年（1922）、第4回帝展に「近江富士」を出して、初入選となっていますが、帝展の傾向に疑問を持って、自由な美術研究会白光会を結成したために早苗会を破門になっています。以来、東南アジア、インドの仏教壁画を模写する旅をつづけたのち、宗教画家の道を独自に歩むことになります。

早苗会は会員の多い時には300名ほどに達したといわれます。毎月の研究会をはじめ、見学旅行、講演会などを開催して研鑽していました。山岳部があったことは特筆にあたいすることでしょう。そこで培った写生技術を生かし、多くの会員は風景画を描いています。師の雄大な風景画に倣つたものが多いのですが、画家各自の特色はでています。早苗会は京都岡崎の勧業館で毎年開催されました。

滋賀文化財教室シリーズ No.176号

発行年月日 1998年3月31日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525